

シリーズ
かほく
市の文化財 No.22

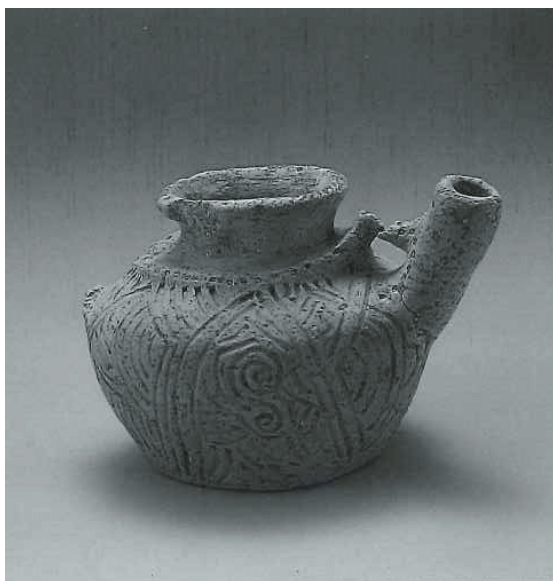
遺物 編 かほく市で出土した不思議な遺物 (1)

一年で一番寒い「大寒」を過ぎましたが、まだまだ寒いですね。お酒が好きな人は御存じかと思えますが、12月～3月は日本酒の仕込みをする季節です。これは、寒い季節の方が酒の発酵をコントロールしやすく、美味しく仕込むことができますからだそうです。今回は、この発酵に因んで、かほく市の遺跡から出土した不思議な土器について紹介します。

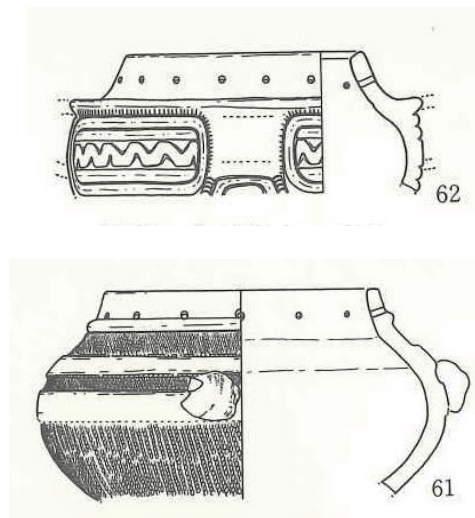
その不思議な土器は、縄文時代中期の上山田貝塚から出土した「有孔罎付土器」といいます。壺のような形をしており、器の縁付近には「孔」が等間隔に一列にめぐるように開けられています。この「孔」をどう考えるかがポイントで、色々な用途の説が唱えられます。

た。その内の一説には、この「孔」を中身が発酵した際に発生したガスが抜けるためのものと考え、「醸造のための器」という説があります。他にも、縄文時代後期の気屋遺跡からは、現代の急須のような形をした「注口土器」も出土しました。おそらく何らかの液体を注ぐための土器であることが分かるかと思えます。

この不思議な土器は、いまだ用途について不明ですが、もしもお酒に関する遺物だったとすると、かほく市の縄文時代の人たちはどんなお酒を飲んでいたのか気になりますね。



気屋遺跡出土「注口土器」



上山田貝塚出土
「有孔罎付土器」